夏休みの教室

ひぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏休みの教室

【Ｎコード】
Ｎ８４２８Ａ

【作者名】
ひぃ

【あらすじ】
全教科テスト赤点の運動バカ主人公と、ガリ勉貧弱ヒロインの（笑）、夏休みの出来事の話です。

第1話：テスト

夏。それは新たな出会いを感じさせる季節。
夏。それは非日常的なことが起こりそうな季節。
夏。それは…。

「梶山、お前こんな点を取って恥ずかしくないんか？」
「は、はぁ…」
俺、梶山雪人は今、担任の山口先生（通称ヤマ先生）にお叱りを受けている最中だ。時計は午後3時を指している。かれこれ4時間、説教を受けている。
「お前、運動は確かに出来るが、学業も少しは力を入れてもらわんとなぁ」
1学期最後の授業だった今日は、学期末のテスト返しと終業式の2時間で終わった。クラスの奴らはチャイムが鳴ったと同時に教室を飛び出していった。学生生活の中でも、今日という日が1番幸せな日だ…と、俺は思う。
俺だってみんなと一緒に教室を飛び出したかった。今日は予定があったんだ。親友のユウジとゲーセンに行く約束だったし、その後はクラスの奴らとカラオケ大会だったんだ。
でもみんなキャンセルになった。いや、キャンセルにさせられたんだ。今目の前にいる人物に。担任のヤマ先生に！
「先生、俺用事があるんでそろそろ…」
「！何をバカなことを！用事だと？どうせ遊び呆けるつもりなんだろう。今何を話してたか分かってるのか？」
「…俺のテストの点のことです」
「そうだ。全教科赤点のお前に、夏休みがあると思っているのか？」
ヤマ先生の言葉に、俺は目を丸くした。

「え？」
「赤点のお前には夏休みはないんだよ」
ヤマ先生が眉間にしわを寄せて言葉を繰り返した。目が本気すぎて怖かった。俺はおそるおそる、もう一度聞いてみた。
「えーっと、赤点の俺は夏休みがない…っておっしゃったんですか？」
ヤマ先生はゆっくりと頷いた。何度も頷いた。
「そういうことだ。まぁ夏休み全部が潰れることはない。来週の頭から1週間、みっちり勉強だ」
「せ、先生、でも俺来週ばあちゃんの家に帰る予定が…」
せっかくの夏休みだぞ。勉強なんか誰がするか！
俺は嘘をついた。ばあちゃんの家なんて行く予定はない。何故なら一緒に住んでいるからだ。しかしヤマ先生は困った顔をせず、逆にニヤリと笑った。
「先生、今日梶山のお母さんに電話して聞いたんだ。来週は特に予定はないっておっしゃってたぞ。めいいっぱい、勉強をやらせてくださいとも、おっしゃってたな」
「なっ！きったねぇー！！親に連絡するなんて…」
俺はカッとなって文句を言った。するとすかさず、ヤマ先生の日誌パンチが俺の頭にヒットした。
「いってぇ！」
「きったねーとはなんだ！そう思うなら次からは赤点を取らんことだな。よし、じゃもう行っていいぞ」
ヤマ先生は席を立ち、職員室を出ていった。俺は深い溜息をついて職員室を後にした。

来週から学校かぁ。なーんだかなぁ。
俺は重い足取りで自分の教室へと向かっていた。ヤマ先生に呼ばれ

るまでは、自然とスキップが出ちゃうくらい心が軽かったのに。今じゃ両足に重りを付けて歩いているみたいだ。そうこうしている内に自分の教室に着いた。ドアの取っ手に手をかけ開けると、見知らぬ女子生徒が俺の席にうつ伏せになって座っていた。

「えーっと…？」

俺はびっくりしつつも、自分の席に近づいた。誰だ？クラスの奴…じゃないな。見たことない子だな。

「あ、あのぉ」

声をかけてみた。けれど起きる気配がない。もう一度呼んでみたが、結果は一緒だった。今度は肩を叩いたりしてみた。さすがに起きるだろうと考えたが、全く起きない。

「…死んでる？」

俺は一瞬ひやっとしたが、静かにしているとスヤスヤと寝息が聞こえた。爆睡しているようだ。

「なんだよ…」

はぁ…と、また大きな溜息をついて、俺の席の1つ前の席に座った。無理やり起こすやり方もあるけど、この見知らぬ女の子の寝顔を見ていると、とても出来そうになかった。スヤスヤと幸せそうに寝ているのだ。夢を見ているのか、時々笑みを浮かべていた。

俺はしばらく時間を忘れてその子を見つめていた。

よく見ると肌がとても白い。風に吹かれて、簡単に消えてしまいそうなくらいだ。髪の毛はうつ伏せになっているので分からないが、肩までの長さのようだ。栗色で柔らかそうな髪だ。顔立ちも良く、桜色の唇がとても可愛かった。

「…俺、何見てんだ？」

急に恥ずかしくなってしまった。きょろきょろと辺りを見回したが、誰もいない。俺はほっと胸をなで下ろした。このまま待つのはやめよう、何だか気が狂いそうだ。俺は彼女の肩を揺すった。

「おいっ、起きろよ」

「ん…」

起きた彼女の目は開いてはいるものの、焦点があっていないみたいだ。俺の顔をじーっと見ている。そしてきょろきょろと周りを見た。
「君誰なの？そこ俺の席なんだけど」
「え？梶山君の席？」
俺の名前を知ってる！でもこの子、本当に見覚えがないんだけど。
「どこかで会ったことあるっけ？」
「何言ってるんですか。私同じ…」
彼女は始めは笑いながら話していた。が、その途中でぴたりと止まってしまった。だんだんと顔が赤く染まっていく。そして表情が引きつっていった。
「あ、あれ？なんで梶山君が？私…」
「あれって、聞きたいのは俺のほうなんだけど？」
「わぁぁぁ！ご、ごめんなさい！！」
突然大きな声で謝った彼女は、勢いよく立ち上がり、猛スピードで教室を飛び出した。しかし勢い余って、額をドアにぶつけてしまった。
「痛っ！」
「だ、大丈夫かよ！？」
彼女は、だ、大丈夫です…と、額を押さえながら教室を出て行った。
「…ドジだな」
俺はぷっと吹きだした。嵐のような子だった。
「俺も帰ろー」
彼女が席を立ったので、俺は机の中のものを出すことが出来た。ガサガサと手を突っ込み、机の上に出した。配られたプリントがぐしゃぐしゃになっていた。俺のいつもの癖だ。ヤマ先生は俺のプリントを見るたび、
「なんとかしろよ！情けない」
と、説教する。まぁそんなのはいつものことだから気にはしない。
「？何だこれ」
ひらりと、薄いピンクの封筒が机の上から落ちていた。拾い上げて

みると、宛名は俺の名前が書かれていた。まるっこい可愛い字だ。
封筒の色からして、さっきの彼女の唇を思い出してしまった。
「こ、こら、俺は何を…ひょっとして、俺ってば欲求不満？」
まぁ、ここ何年か彼女なんていなかったし…と、考えかけてすぐに頭を横に振った。
「あー、もう！」
俺は恥ずかしくて、いやらしい気持ちを消すように封を切った。中には一枚の紙が入っていた。広げてみるとそこには…。

「伊東小春、数学、９８点…？？」

その手紙はラブレターではなく、伊東小春の数学の答案用紙だったのだ。
「これをもらってどうしろと？…つーか、めちゃめちゃ頭いいし。つーか、伊東小春って誰？」
俺は生まれて初めて、テストのラブレターをもらったのだ。

第2話：1日目

「伊東小春？お前クラスメイトの名前も覚えてないのか」
ヤマ先生が呆れた顔で言った。

今夏休み真っ最中。なのに俺は真面目に学校に来ている。今日から1週間、みっちり勉強をするためだ。本当はサボりたくて仕方がなかったけれど、朝から母親の猛攻撃に遭い、しぶしぶ学校に来た。
そして今、教室でヤマ先生に勉強を教えてもらっているのだ。
「いくら俺だってクラスの奴らは覚えてますって」
俺はむっとして答えた。
ヤマ先生はガハハと豪快に笑った。俺は昨日、机に入っていたテストの答案用紙をヤマ先生に見せた。ピンクの封筒に入っていたのは秘密にした。ヤマ先生の性格からして、面白がって俺で遊ぶだろう。それに伊東って子の立場を考えても、打ち明けないほうがいいと思った。ヤマ先生には、間違えて入っていたと伝えた。
「そうだな、伊東は滅多に学校に来ないからな」
「え、じゃあ本当に同じクラスの？」
「そうだ。お前達のクラスメイトだ。ちょっとした事情があって、学校を休みがちなんだがな。そうだな、このクラスになって始めの頃は来ていたんだがな」
「そうなんですか……」
俺は初日のころを思い出してみた。けれど伊東小春……なんて子は、やっぱり分からなかった。かわりに頭に浮かんだのは、親友ユウジの寒いギャグだった。
確かあいつ、自己紹介で寒いギャグを連発してたんだよな。「あ、そういえば今日から伊東が登校してくるんだ」
「え？　登校？」
思い出から急に現実に戻った。

「なんで？　今夏休み……あ！」
ピーンッと俺の頭が閃いた。今日の俺は冴えてるぞ！
「あれでしょ？　俺のお仲間なんですよね？　学校休んでんだもん、テストは赤点で間違いないっす！」
「ばーか、お前と一緒にするな。だいたいこのテスト見たら分かるだろ」
ヤマ先生はひらひらと俺の目の前に、伊東小春のテストをちらつかせた。ま、まぁ確かに、数学９８点を取るやつは赤点なんてないんだろう。じゃあ、どうして学校に？
「ま、お前は自分のことだけ考えろ。このプリントが出来たら持って来いよ」
ヤマ先生はびっしりと問題が詰まっているプリントを俺に渡した。白い紙のはずなのに、なんだか黒い紙に見える。
「これが終わったら帰っていいっすか？」
「何言ってる。終わったら休憩だ。まだまだあるんだからな」
ぐへっ。鬼だ、鬼。ヤマ先生はニヤリと笑い教室を出て行った。
「きっと雑用とかもやることになるんだろーな……」
今日職員室に行ったとき、ヤマ先生の机の上には、大量のプリントがあった。何気なくプリントのことを聞くと、
「これは後で整理させるもんなんだ」
とヤマ先生は答えた。『させるもん』……俺にやらせるつもりなんだ。
「ちっくしょー、ヤマ先生め……」
そう呟いたとき、教室のドアが開いた。俺はヤマ先生が入ってきたと思い、
「ご、ごめんなさい！」
と頭を下げた。
「え、えっと……」
「？？？」
頭を上げると教室に入ってきたのは、なんと昨日教室にいた女の子

だった。彼女は困ったような顔をしていた。
「ごめんなさい……？　それって……」
「あ、い、いや」
「わ、分かりました。そうですよね、断って当たり前ですよね」
「は？」
何を言っているんだ、この子。まるで話が見えない。俺は彼女を落ち着かせようとした。
「あのね、俺先生と君を間違えて」
「いいえ、いいんです。分かってたことなんです。私がフラれることは……」
彼女はますます分からない話をしている。フラれる？　断って？……ぐるぐると頭の中に、つながらない言葉が回った。
「ま、まって！　フラれるって君、フラれたの？　誰に？」
「！！……何言ってるんですか？　今さっき私にごめんなさいって言ったじゃないですか！」
「今のごめんは、君とヤマ先生を間違えたんだよ。てっきりヤマ先生だと思ってたから」
「あ、そ、そうなんですか」
彼女は顔を真っ赤にして俯いた。サラッと肩までの髪の毛が、彼女の顔を隠した。
「……あ、えっと君は？」
彼女ははっとして顔を上げた。頬が林檎のように赤かった。
「わ、私、伊東小春です。……知らないかもしれないんですけど、同じクラスなんですよ」
「あっ……！」
伊東小春。君がそうだったのか。俺はヤマ先生の話を思い出した。ー事情で学校を休みがちなクラスメイト……。そうか、君が……。
「そう言えば、昨日教室にいたよね？　何してたの？」
「えっ！　えっと、手紙……」
「手紙？」

「はい。手紙、読んでないですか？」
手紙？　そんなもの……あ。
「もしかして、これ？」
俺は昨日の答案用紙を渡した。受け取った彼女の顔が、だんだんと青ざめていった。
「手紙はなかったけど、封筒に入ってたよ？」
「あ、あ……」
「えーっと、大丈夫？」
「……」
彼女は言葉が出ないらしく急に話さなくなった。相当落ち込んでいるみたいだ。
「ま、まぁ間違えることはよくあるよ、うん」
「……」
「俺だって違う教科書を広げたりするし」
「……」
……俺、何必死でフォローしてんだ？しかもフォローになってないような？だ、大丈夫かな、この子。
「伊東さん？」
俺が彼女の名前を呼ぶと、それを合図に彼女の体がふっと後ろに倒れてしまった。ガタガタッと机がぶつかり合い、床をこする音も響いた。
「伊東さん！？」
びっくりした俺は、彼女を抱えて、勢いよく教室を飛び出した。

スースー……。
彼女の寝息が聞こえる。
ここは保健室。夏休みなので保健の先生はいなかったが、他の先生に事情を話し、保健室を開けてもらった。

「えっと山口先生の生徒さんね？山口先生に伝えておくから」
「あ、お願いしまーす」
俺はぺこりと頭を下げた。そして寝ている彼女の側にあるイスに座った。
「……やっぱりドジっ子なんだ」
昨日のドアといい、今日の倒れ方といい、漫画に出てきそうなくらい見事なものだった。
「頭打ってないといいけど」
「……ん」
彼女がゆっくりと目を開けた。ドジっ子のお目覚めだ。
「ここは？」
「ここは保健室だよ」
「！！　か、梶山君！？　どうしてここに」
「伊東さん、急に倒れちゃってさ。保健室に運んだんだよ。覚えてない？」
彼女はしばらく考え、あっ！と、小さく呟いた。そして深々と頭を下げた。
「本っ当にごめんなさい！　私って小さいころから人に迷惑かけてばっかりで……。本当にごめんなさい」
「い、いや、そんなに謝ることないよ。びっくりはしたけど」
「……ありがとうございます。そう言ってもらえるだけで嬉しいです」
彼女はニコリと笑った。口元には小さなえくぼが見えた。自然と、あの可愛い唇に目がいった。
「いやいやいや。俺何見て……」
「どうかしたんですか？」
きょとんとした彼女。俺は何でもない、と頭を振った。ちょっとクラクラした。
「あ、あの」
「え、何？」

彼女が言いづらそうな顔をしていた。掛け布団をぎゅっと握りしめている。
「あのテストのことなんですけど」
「あ、あぁ」
「私本当はテストじゃなくて、私の気持ちを渡したかったんです」
元々、小柄な彼女がますます小さく見えた。肩がかすかに震え、瞳にはうるうると涙が溜まっていた。
今さら言わなくても、俺には彼女が何を伝えたいのか、それぐらい簡単に分かっていた。しかし俺は黙って彼女の言葉を待った。彼女の口から直接聞きたかった。何故なら俺は、今まで『愛の告白』を受けたことがなかったのだ。
「わ、私……」
彼女の言葉に反応して、ごくんと唾を飲み込んだ。手に汗が流れた。喉がカラカラで、体温がどんどん上がっていく。心臓が壊れそうなくらい、鼓動を打っている……。俺は、今まさに、初体験をしているのだ。
「私、梶山君のことっ！！」
きたーっっ！！
俺の体温が限界点を突破したとき、保健室のドアが急に開いた。続いて、どたどたと騒がしい足音が入ってきた。
「伊東！　大丈夫かっ！？」
振り返るとヤマ先生が汗びっしょりの顔で立っていた。俺と彼女は目を丸くしてヤマ先生を見た。
「せ、先生……」
「今日は特に暑いからな。やっぱり無理させるんじゃなかったな……ってあれ、梶山？　何でこんなとこに？」
ヤマ先生は、ぶすっとした顔の俺を見つけた。何で？　俺が運んだんでしょーが！！……そう言おうとしたとき、彼女が説明をしてくれた。
「先生、梶山君がここまで運んでくれたんです」

「そうなのか、そりゃ悪かった。ありがとな」
「いえ、別に」
「なーに、ふくれてんだ？　あ？」
「何でもないっす」
俺とヤマ先生の会話に、彼女がクスクスと笑った。
「あ、伊東さん、後ろ頭大丈夫？　強くは打ってないから、大丈夫だと思うけど……」
彼女は自分の後ろ頭をさすった。ヤマ先生が心配そうな顔をした。
「ちょっとたんこぶが出来てるかも」
と、彼女は小さく笑った。
「伊東、もう帰れ。体調が良くなってから来ればいいから」
「あ、私はもう大丈夫です。別に発作で倒れたわけじゃないんです。明日から学校行きます」
「そうか？　まぁ無理だけはするなよ？」
こくんと彼女は頷いた。ヤマ先生は、よしっ……と両手をパチンと叩いた。
「梶山、お前はもういいから伊東を送ってくれ。また倒れたら大変だ」
「えっ。じゃあプリントは……」
「明日にまわす。明日やれ」
はぁ……そう上手くいかないですね。俺は肩をがっくりと落とした。
彼女はまたクスクスと笑った。ヤマ先生は、これから会議が始まるようで、俺によろしくな、と一言だけ残して出ていった。
「……さてと、どうしようか。すぐ帰る？　それともまだ休む？」
「今日は……帰ります」
彼女はにこっと笑って掛け布団から体を出した。俺はさっきの告白を期待していたので、ちょっと残念だった。
ま、空気も途切れちゃったし無理ないな。……でも俺、何て答えるつもりだったんだ？
「分からん」

「え？」
「あ、いや独り言。えっと、カバンは教室？」
「あ、はい。多分倒れたときに落としたと思うので」
「俺取ってくるから、靴箱で待ってて」
軽く彼女に手を振って保健室を出た。

「これだよね？」
俺は彼女にカバンを渡した。
「ありがとうございます」
と、彼女は会釈した。
「どうやって帰るの？」
「駅前からバスに乗るんです」
「あ、俺も駅前からバスに乗るよ。じゃ駅までな」
俺たちは2人並んで学校を後にした。

2人で歩き出して数十分が経った。会話が弾まず、俺は1人パニックになっていた。よく考えたら俺ってば、女の子と2人っきりは生まれて初めてだった。
「ご、ごめんな」
謝った俺に彼女はびっくりした顔をした。
「俺何もしゃべれなくて。いつもは違うんだ。ユウジ達といるときはしゃべれるんだけど。何だか緊張しちゃって」
「わ、私もなんです。私も緊張して……。男の人と一緒って初めてだから」
「そ、そっか」
俺はちょっぴり嬉しくなった。彼女も自分と同じことを思っていたことに。そうと分かると、今までカチカチだった心と体が解けだし、

ぺらぺらと話が出来るようになった。彼女はうんうんと頷き、笑ってくれた。いつの間にか、彼女が笑ってくれることに嬉しさを感じるようになった。
「あ、俺５番乗り場」
あっという間に駅に着いた。
「私は１０番なんで。じゃ、ここで」
彼女がぺこっと頭を下げ、バス停へ歩き出した。
「あ、あのさ！」
俺は彼女を呼び止めた。
「あの、気になってたんだけど敬語やめない？　俺ら同級生だしさ」
「あ……うん」
彼女は頷き、また頬を赤く染めた。
「じゃ、じゃあまた明日な」
「うん、また明日！」
彼女はバス停のほうへ走っていった。途中、何もないところで躓いた。俺はひやっとして、彼女のもとへ駆け寄ろとした。しかし彼女は、バランスを取り、こけることはなかった。俺のほうへ振り返って、手を振った。自分は大丈夫だ……と伝えているのだろう。
「ドジっ子……」
俺はぷっと笑った。そして手を振りかえし、５番乗り場に向かった。

また明日……か。
俺は揺らぐバスの中で考えていた。あんなに学校に行くのが憂鬱だったのに、伊東小春が現れてすっかり変わってしまった。
「伊東……小春」
俺はゆっくりと目を閉じ、明日を夢見るため眠りについた。

第3話：2日目

彼女に会って、俺は本当に変わった。

休みの日は、絶対昼過ぎに目が覚めるのに、今日は学校へ行く日と同じ時間に起きた。朝食もちゃんと取り、何もかもが夏休みが始まる前の生活だ。

「行ってきまーす」

俺の行動に母親は目を丸くさせ、少し遅れて、行ってらっしゃい……と軽く手を振った。

7時30分か。ちょーっと早く着きすぎたかな。

いつもは学生がたくさんいる駅前は、夏休みということで、サラリーマンの姿しか見当たらない。俺は駅前のコンビニでパンを買い、ちょっとした広場のベンチに座った。

「こっから歩いても学校まで30分もかからない。うー、勉強する時間が増えるなぁ」

買ったパンを口に運んだ。

「梶山君？」

突然名前を呼ばれたので、口の中のパンが喉につまった。とっさに胸のあたりを叩いた。

「ご、ごめんなさい！　大丈夫？」

声の主は彼女、伊東小春だった。おろおろとしている。

「大丈夫だよ。ちょっと、つまっただけだから」

俺はゴホンと大きな咳をした。だいぶ苦しさがなくなっていった。

「それにしても……早いですね」

彼女はストンと俺の隣に座った。

「それなら伊東だって早いじゃん」
「あ、私はいつもこの時間なんです」
「えっ！　毎日？」
そう言って俺は後悔した。彼女の顔が一瞬曇ったのだ。
「毎日ってほど通ってないんですけどね」
そうだった。彼女は学校をよく休むんだった。理由は知らないけど、昨日の話とヤマ先生の態度からみて、体が弱いみたいだ。
「……そろそろ行こうか」
「はい！」
「あ、敬語はやめよって言ったよな？」
「！　そうでした……って、あれ？」
彼女ははっとして口を抑えた。何だか癖みたいです……と、申し訳なさそうに言った。
「でも、敬語ですけど、別に梶山君のことを友達じゃないって思っているわけじゃないんです！それどころか私はっ……！」
そう言いかけて彼女は黙ってしまった。俺も体が硬直した。心臓だけが元気よく動いていた。しばらくの間、２人の間に妙な空気が流れた。
「い、行こうか」
耐えられなくなった俺は、すたすたと歩き出した。彼女はひょこひょこと俺の後に続いた。２人とも顔を下に向けて、耳まで真っ赤にして。

「おー、来たな」
職員室前に着くとヤマ先生が出迎えてくれた。俺にとっては、いらない出迎えだけど。
「伊東も一緒か。まぁ入れ、入れ」
「失礼しまーす」

職員室に入ると、クーラーからでる風が俺たちを包んだ。
「うお～、涼しぃ」
「今日は視聴覚室で勉強してくれ。ほれ、鍵」
俺はヤマ先生から鍵を受け取った。
「ラッキー。視聴覚室ってクーラーあるんだよね。もちろん付けていいっすよね？」
「あぁ、構わん。で、これが今日の勉強な」
ヤマ先生は、何枚ものプリントをステープラで止めた冊子を渡した。ペラペラとめくると国語、数学、英語の問題が詰まっていた。枚数にして１教科２０枚近くはある。
「……なんすか、これ」
「各先生方に協力してもらったんだよ。数学はわしが作ったからな。この期間中に全部終わらせて、最終日はテストするからな」
「！！！　そんなの聞いてないっすよ！」
俺の悲痛な声にヤマ先生は容赦しなかった。
「そりゃそうだ。言ってないからな」
ヤマ先生はガッハッハと大きく笑った。ひそかに彼女も笑っていた。
「伊東が笑わなくてもいいじゃーん」
「何言ってる。はるかにお前より、伊東のほうが点数いいんだからな。はやく取りかからんと終わらんぞ～」
「失礼しましたッ」
俺はもらったプリントを握りしめて職員室を出た。ぺこりと彼女はヤマ先生に頭を下げた。

「あー……涼しぃ」
ピッとボタンを入れて出てきたのは、冷たい風だった。この広い視聴覚室を冷やすには数十分はかかりそうだ。
「こっちこっち」

彼女がクーラーの風が届かない場所に立っていたので、特等席に座らせた。特等席……風がガンガンに届く場所だ。
「遠くにいたら暑いだけだよ」
俺も特等席に座った。視聴覚室の椅子と机は、横につながっている。なので自然と俺と彼女は、仕切りなしの隣同士に座った。
「じゃ、勉強しよーかな……そう言えば伊東は何するの？」
「あ、私は本読んだり、先生の雑用したり……」
「えっ！　そのためだけに来たの？　それぐらいなら、わざわざ来なくても」
「学校、好きなんです」
そう言った彼女は笑顔を見せた。しかし、好きと言っているのに、顔は寂しそうだった。彼女はカバンから1冊の本を出した。
俺、また聞いちゃいけないこと聞いたみたいだな。うーん……。
「そうだ！　俺の先生になってよ」
「え？」
突然のお願いに、彼女は手に持っていた本をストンと落とした。何落としてんだよ、と俺はそれを拾い上げた。
「数学、得意なんだろ？他の教科も得意そうだし。あ、でもずっと学校出てないから無理かな」
「ううん、今までなら勉強してたから大丈夫です。やらせてください」
彼女の目がランランと輝いた。俺は嬉しくなった。やっぱり彼女は笑った方が可愛い。
「じゃ、今日から今週、よろしくお願いします」
「はい！　こちらこそお願いします」
こうして俺は彼女に勉強を教えてもらうことになった。

「ここのxをこっちに持ってきて……」

「あ、そっかそっか」
勉強を始めて数時間。彼女の教え方は、ヤマ先生よりも分かりやすかった。スラスラとプリントに答えが埋まっていく。
「教え方上手いね」
「そんなことないです！　梶山君の飲み込みが早いから」
「いやいや、そんなことは」
「いえいえ、そんなことあります」
と、俺たちはお互いに謙遜した。途中で彼女がクスクスと笑った。
「俺たち、さっきから何言ってんだろーね」
「本当。でも楽しいですから」
突然、ピリリッと携帯電話が鳴った。聞いたことがない音だったので、俺の呼び出しではなかった。
「ケータイ、呼んでるよ？」
「え、あっ！」
彼女はゴソゴソと携帯電話を取り出した。彼女らしい、薄いピンクの折りたたみ式だった。それによく見ると、どこかで見たことあるようなタイプだ。
「あ、俺と一緒じゃん」ほらっ、とズボンのポケットから銀色の携帯電話を出して見せた。
「わっ、本当だ」
彼女は自分の携帯電話と俺の携帯電話を見比べた。
「これ結構、前の機種だからさ。同じのを持ってる人、初めて見たよ」
彼女はパコッと携帯電話を開き、ピッとボタンを押した。
「そうですね。もうみんな新しいものですよね」
そう言いながら、彼女はまたカバンをあさった。中から小さな巾着袋を出し、そこからパラパラと錠剤を出した。
「薬？」
「あ、はい。さっきの音はタイマーなんです。もうお昼だから薬を飲む時間なんです」

俺は自分の携帯電話の画面を見た。もう昼の1時を過ぎていた。気づけば腹が減っている。それに気づかないほど、俺は集中していたのだ。
「なんか食べよーか。コンビニ行くけど伊東は？」
「あ、私持ってきてるんです」
彼女は小さな弁当を見せた。それはとてもとても、とっても小さい弁当だった。これ弁当じゃねーよ、タッパーだよ。
「そんなんで腹一杯になんの？」
「なりますよ。これでも多いほう」
「これで多い！？　信じられん」
「ふふっ。あ、はやく行かないとコンビニいっぱいになりますよ」
「お、おー」
俺は財布と携帯電話を持って学校近くのコンビニに向かった。

「いらっしゃいませー」
コンビニの中はクーラーが効きすぎていて寒かった。外との温度差のせいで、ますます寒い。
「よぉ、ユウジ」
「おっ！　雪人じゃん……って、どうして制服？」
親友のユウジは、このコンビニでバイトをしている。長いこと働いているのでベテランだ。
「学校で勉強してんだよ。……何食べよっかな」
「勉強！？　お前が？」
ユウジが大きな声で叫んだ。店にいた客がジロリと俺たちを睨んだ。
「俺が勉強しちゃあ悪いっての？」
俺は少しむっとした。ユウジが珍しいものを見る目で俺を見た。
「だってお前、全教科赤点なんだろ？」
「そのせいで夏休みに勉強することになったんだよ。……この弁当

と……」
「はぁー、ご苦労様」
ユウジはレジに戻り、並んだ客の相手をした。俺は飲み物を探した。
でも、ユウジが思ってるほど、苦労とは思っていない。
確かに勉強は嫌いだけど、貴重な夏休みが無くなるのは嫌だけど、
学校へ行くのは楽しみなのだ。
「ユウジ、伊東小春って知ってる？」
「イトウコハル？誰だそれ」
ユウジは俺の弁当を電子レンジに入れた。そして慣れた手つきでレ
ジを操作し、お釣りを渡してくれた。
「同じクラスの奴なんだけど」
「そんな奴いたか？」
ユウジが首を傾げる。まぁ無理もない。俺だって知らなかったんだ
から。
「知らないならいいんだ。バイト頑張れよ」
ユウジに挨拶をして暑い外へと出た。

「はーっ！　終わったーっ！」
俺はうんっと伸びをした。久しぶりに真剣に勉強をしたような感じ
がした。
「お疲れ様です」
彼女がぺこっと頭を下げた。
「本っ当ありがと。マジ伊東のおかげ」
彼女は顔を真っ赤にさせ、
「そんなことないです。私も復習になったから良かったです」
と、照れ隠しをした。ちょうどいいタイミングでチャイムが鳴った。
時計は午後5時を指していた。
「もう5時か。昨日のところまで送るよ」

「い、いえ。今日は寄るところがあるので……」
「あ、そうなんだ」
「はい。ごめんなさい、せっかく声かけてもらって」
「いいのいいの。別に約束してたわけじゃないしね。気にしないで」
俺と彼女は視聴覚室を出て、職員室へ鍵を返した。ヤマ先生に一言あいさつをしようと思ったが、クラブで忙しいらしく姿が見えなかった。
「そう言えば大会が近いって言ってました」
ヤマ先生は数学教師でありながらバスケット部の顧問をしている。何でも大学時代のとき、バスケット大会で何度も優勝したことがあるそうだ。
「ま、いいや。帰ろ」
俺たちは職員室を出て靴箱へと向かった。

「じゃ、また明日な。今日と同じ時間でいい？」
「あ、私はいいですけど、梶山君はいいんですか？」
「あーうん、平気。早起きもいいもんだよ」
「だったら……また明日」
彼女はぺこっと頭を下げて学校を出ていった。俺はその姿を見送った。
「あらぁ、あの子はどなたなのぉ？」
「！！！」
急にネチネチした声が聞こえ、俺は振り向いた。声の主はユウジだった。
「なんだ、その声。気持ち悪い」
「あらっあらあら。親友のことを待っていたのに、なんてヒドイお言葉」
ユウジは泣き真似をした。いつものことなので俺は無視した。
「無視しないでくれよ、マジ寂しい感じするし」
「だったら、変な言葉使いはやめるんだな。で？　何で待ってたん

だよ？」
「うん。まあ立ち話もなんだから、いつものとこ行こうぜ」

いつものところ。そこは駅前にあるファーストフード店だ。よく俺たちはここに集まって話をする。いわゆる、溜まり場ってやつだ。
「で？　なんだよ？」
「急いじゃイヤン」
「だーかーらー！」
「先にさっきの子、誰なんだよ？」
ユウジがずずっとジュースを飲んだ。ユウジはオレンジジュースが大好きな少年だ。
「あの子は……」
「彼女？」
ユウジの言葉に、口に含んでいたジュースが吹き出てしまった。
「うわっ！　きたねぇ」
「お、お前が変なこと言うからだろ！」
紙の布巾を多めにとって汚れた場所を丁寧に拭いた。
「だって端から見たら、完璧に彼氏彼女に見えたよ。ん？　もしかして、ユキトくんの片思い？」
「ばっ！ちげーよっ」
「あら。だったら女の子の片思いかな？　でも俺には両思いに見えたけど？」
ニヤニヤしながらユウジはポテトを食べた。完全に遊ばれてる。なんとか話題を変えなくては。
「もういいだろ。そっちの番！」
「えー、もう少し聞きたいなぁ」
俺はキッとユウジを睨んだ。お～怖っ、とユウジは首を引っ込めた。
「えっと今日の昼間の話なんだけど。伊東小春だったっけ。俺さ、

知らないって言ったけど、なーんか気になって。バイト終わってクラスの奴に聞いたんだよ。そしたらそいつ、家が近いからよく知ってて。あ、本当に同じクラスなんだな、その子」
俺はドキドキしながらユウジの話を聞いた。やっぱり覚えてるやつはいるんだ。ユウジはパクパクと数本のポテトを口に運んだ。
「その子、小さい頃から心臓が弱くて、入退院を繰り返してたんだって」
「心臓が……」
俺はびくっと体を震わせた。ヤマ先生が言ってた『事情』はこのことだったのだ。
「でも小学校、中学校は何とか学校に行けて、成績も優秀で無事卒業出来たんだと」
ユウジはまた、ずずっと音を立ててジュースを飲んだ。
「俺らの高校にも受かって、順調にいってたんだけど……。去年の春ぐらいからおかしくなったんだって」
「おかしく？」
「発作はよく出てたらしいんだけど、その頃から発作が激しくて、入院する期間が増えたんだと。そしたらさ、学校に行けなくなるじゃん？なんとか2年までは、出席数ギリギリだったみたいだけど……」
ユウジが少し声のトーンを落とした。
「3年は今の時点で出席数が足らないんだって」
「足らない？ってことは……」
「卒業出来ない。留年ってこと」
留年……。俺は愕然とした。あんなに頭が良くて優しい子が留年なんて。信じられない。
「俺、雪人が言わなかったらその子の存在、知らないままだったよ。なんか、あれだよな。同じクラスなのにさ。きっと知ってる奴なんていないと思う」
ユウジが寂しそうな顔をした。

俺はユウジの話を聞いて、彼女のことを思い出していた。
学校が好きだと言った彼女。
寂しそうな顔をする彼女。
薬をたくさん、何種類も飲む彼女。
そして……笑った彼女。
たった2日しか会っていないというのに、随分と前から友達だったような感覚だ。それぐらい、彼女との2日間は大切な時間だったんだ。
「それにしても雪人、よく知ってたな？」
「……あの子なんだ。伊東小春って」
「あの子って、今日お前と一緒にいた？」
俺はこくんと頷いた。
「……そっか」
ユウジはそれ以上何も話さなかった。俺も何も話さなかった。
……いや、話せなかったのだ。頭が混乱し、何も考えられない。

何も考えられない。

足下から、確かにそこにあった幸せが、音を立てて崩れていった。

第4話：3日目（1）

「梶山君、大丈夫？」
「え？」
彼女の声で俺ははっとした。
「えっと……？」
「今朝から何だかおかしいですよ？体調が悪いんですか？」
彼女が俺の顔をのぞき込んだ。俺は目の前にある彼女と目があった。しかしぱっと視線をはずした。
「きっと慣れないことしてるから、ちょっと疲れたのかも」
「じゃ、休憩しましょ。私もちょっと疲れちゃいましたから」
彼女は小さく笑って言った。

昨日のユウジの話のせいで、まともに彼女の顔が見れなかった。どうやって彼女に接したらいいのか分からなくなってしまった。今までどうやってきたんだろう、思い出せない。
すると突然、昨日も聞いた携帯電話の音が鳴った。彼女の薬の時間だ。
「あ、もうお昼なんですね。今日もコンビニですか？」
彼女はカバンの中から、小さな弁当と巾着袋を机の上に置いた。あの巾着袋には、幾つもの薬が入っているのだ。それを見た瞬間、俺は急に立ち上がり、机の上のものを片づけた。彼女が不思議そうな顔で俺を見た。
「今日は昼までですか？」
「伊東も片付けて」
「え？」
「課外授業するんだよ」

夏休みの街中は、平日とはいえ人が多かった。お昼時なのでサラリーマンたちが飲食店に列を作っていた。時々、学生らしき若い人たちも歩いている。
「ど、どこに行くんですか？」
彼女は俺に手を引かれている。俺は構わず、ずんずんと人波をかき分けて進む。そしてある喫茶店に入った。
「アイスコーヒーと……伊東は？」
「え？　ええーと、レモンティ」
「それください」
俺は財布を出してお金を払った。そして彼女に席を取って待つように言った。彼女は戸惑いながらも俺の言うとおりにした。

2階席のフロアに行くと彼女が手を振った。客は少なく、スーツ姿のサラリーマンと、若いカップルがいた。
「ど、どうしちゃったんですか？」
彼女はぎこちない話し方だった。俺はアイスコーヒーを一口飲んだ。
「言ったろ？　課外授業だって。行きたいとこあったら言って？」
「行きたいとこ、ですか？　で、でも突然……」
「伊東には昨日先生になってもらったから、今日は俺が先生。ただそれだけ」
……実は俺自身、どうしてこんなことをしたのか分からない。教室で薬を見たとき、昨日の話とあの巾着袋が、ぐるぐると頭の中で回っていた。そして気づいたら、彼女の手を引いて街中まで来てしまったのだ。
うわぁ……。俺、とんでもないことしちゃったのか？
「……あそこに行きたいです」
「え？　どこ？」
「新しくできた水族館です」

街からいつもの駅前に行き、そこから電車に乗った。新しくできた水族館は４つ目の駅で降りる。
「うわぁ、着いてしまいました」
水族館の入り口ゲートが俺たちを出迎えた。イルカ２頭が向かい合って入り口を作っていた。彼女は目をキラキラさせて水族館の中へと入っていく。俺はチケット売り場で入場券を買った。
「あ、お金払います」
「いいんだって」
俺は入場ゲートの係員にチケットを見せた。
「どうぞお楽しみくださーい」
係員の言葉を背中に受けて、俺は彼女の手を引いた。初めは遠慮していた彼女も、だんだんと雰囲気に馴染み、笑顔を見せるようになった。

「梶山君、イルカショーってありますよ」
チケットと一緒に渡された館内のマップには、午後から始まるイルカショーのタイムスケジュールが書いてあった。するとタイミングよく館内放送が流れた。
『本日午後４時から南の大プールにて、イルカショーを行います』
「４時から……あと３０分後ですね」
彼女が携帯電話の時計をみた。
「行く？」
「え、いいんですか？」
「まぁ、水族館に来たら普通は、ショーを見ると思うけど」
「えっ！　そうなんですか！」
驚いた彼女はぽつりと、そうなんだ……と感心しているようだった。
俺は、もしかしたら彼女は、今まで水族館に来たことがないのかも

……と考えていた。
入っていきなり、大きな水槽に歓喜をあげて、額をぴったりとくっつけて見入っていたし。サメが近づくと驚いて俺の後ろに隠れたし。ガラス張りのトンネルに入れば、
「すごいです！私海の中を歩いてますよ！」
と、ぴょんぴょん飛び跳ねていた。

「もしかしてさ、水族館……初めて？」
南の大プールに着いて聞いてみた。
彼女は、えーと……と口を濁した。
「実はそうなんです。生まれて初めて、なんです」
「生まれて？！　へぇ、今どき珍しいね」
「……出かけるなんて、学校と病院しかなかったですから……」
そう言って彼女は肩を落とした。なんとなく重たい空気になってしまった。
あぁ！！俺またやってしまった。本っ当、進歩がねぇんだよな。本当に俺ってバカだ……。
「あ、始まるみたいです！」
会場に音楽が流れ、イルカたちが一斉にプールから飛び跳ねた。観客席からは拍手と黄色い歓声があがった。彼女も一緒になって手を叩いている。とても楽しそうだ。
うん、後悔しても仕方ないよな。次はやらかさないように……。
「す、すごいです！イルカって頭がいいんですねーっ！」
「そうだな。伊東とどっちがいいのかな」
「それは……イルカさんですよ！」
彼女は俺のほうを見てにこっと笑い、またプールのほうへ向いた。

今、彼女は元気に笑っている。
目の前にいる子が心臓の病気だって？　そうとはとても思えない。

こんなに体全部を動かして喜んでいる。
……もしかしてユウジの奴、俺をからかっただけなのかもしれない。病気なのは確かだけど、そんなに重たいものじゃないのかもしれない。実際、薬は飲むけど、急に倒れたり、苦しそうな態度は全然ないじゃないか。そうだ、気にすることはない。普通でいいんだ……。そんな言葉が俺をいっぱいにし、俺も彼女と一緒にショーを楽しんだ。そんなイルカショーは、大きな拍手を受けて幕を閉じた。

第5話：3日目（2）

あんなに暑かった外が、太陽が傾いてだいぶ涼しくなっていた。
「もう6時、はやいですね」
俺たちは水族館の近くにある海岸を歩いていた。俺たち以外にも、数名のカップルがいた。
「今日はとっても楽しかったです」
彼女が俺の方を振り向いた。
「別に。礼言われるほどのことしてないし」
「いいえ、私にとっては最高の1日でした」
彼女は砂浜から小石を拾って、ぽちゃんっと海に向かって投げた。
俺は岩場を探して、そこに腰掛けた。夕日を浴びた彼女の横顔はとても綺麗だった。彼女は適当な石を捜しては、海に放り投げていた。
「ねぇ、梶山君」
「何？」
「私の病気のこと、知ってるんですか？」
ぽちゃんっ。
彼女が投げた石は、吸い込まれるように海の中に消えた。
ぽちゃんっ。
俺の心の中にも石が投げ込まれた。今まで静かだった心の海が、石が落ちた場所から波紋が作られ荒れだした。
「……」
「隠さなくてもいいんですよ」
彼女はずっと海を見ている。
「どうして知ってるって分かった？」
「私も確信があったわけじゃないんです。でも、今朝から梶山君の様子がおかしかったし、もしかしたらって思って。当たっちゃいましたね」
ふっと小さく微笑んだ彼女はまた石を投げた。彼女が石を投げる度

に、俺の心に波紋が広がり、ぐらぐらと不安定な気持ちになった。
「……心臓の病気っていうのは、本当？」
「……本当です」

なんてことだ。
気付かないようにしていたのに。
嘘だと思っていたのに。
すべてのことに蓋をしていたのに。
蓋が彼女の返事で取れてしまった。

「そう、なんだ」
蓋が取れても、なんとか必死で言葉を出した。
「でも治るんだろ？　だって薬だって飲んでるんだし」
彼女は俺が期待していた返事はくれなかった。彼女は頭を落とし、首を横に振った。そして俺の方へ体ごと向けた。
「もう治らないんです。これ以上、薬を飲んでも、病院に通っても」
そう言った彼女の顔は涼しい顔をしていた。もう全てを知っていて、運命を受け入れているようだった。
「そんな、だって小さい頃から病院行ったりしてるんだろ？　なのに治らないって……」
小さい頃から病気と闘って、満足に遊ぶことさえ出来なくて……。
あんなにたくさんの薬を飲んでいるのに治らないだって？　そんなことってないだろう？
「私、少ししか学校に通えなかったけど……今の高校に通えて幸せなんです」
彼女は笑顔で話し続けた。
「友達は……やっぱり作るのは難しかったけど、でも大好きな勉強が出来たし、ヤマ先生は良くしてくれたし、それに……梶山君に会えた」
彼女はちょっと頬を赤く染めた。

「高校の入学式のとき、梶山君、友達とグラウンドでサッカーしてましたよね？」
「あ、あぁ。ユウジたちと」
「そのときの梶山君を見て、すっごく楽しそうだなって思ってて、いつの間にか見入っちゃって。ボールが私の方に飛んできたとき、梶山君が走って私を守ってくれたんですよ」
すぐに好きになっちゃいました、と彼女は恥ずかしそうに言った。
「2年生になって病気が悪化して、入院する日が多くなって。3年生に上がることが出来ても、留年決定だったのは分かってたんです。学校を辞めて治療に専念しなさいって両親に言われたんですけど、辞めるなんて出来なかった」
彼女の静かな声が、だんだんと震え、よく見ると小さな肩が細かく震えていた。
「辞めたら一生、梶山君を見れなくなっちゃう……それがとても怖くて出来なかったんです。話が出来なくても、見てるだけでよかった……なのに、3年生で同じクラスになれた」
彼女は顔を伏せ、スカートの端をぎゅっと握っていた。その小さな拳もかたかたと震えていた。
「同じクラスになれてすごく嬉しかった。始めは見てるだけでよかったのに、梶山君に近づきたいって思うようになったりして、どんどん我が儘になってラブレターなんか書いたりして！」
顔を上げた彼女は、目を真っ赤に腫らして、大きな瞳には涙が溜まっていた。
「梶山君を好きになって生きたいって思ってしまった！　もう諦めていたのに、もう分かっていたのに！　一度手放したのにまだ死にたくない！　まだまだ生きていたい！　梶山君と一緒にいたい！　生きたいよっ！！」
俺は立ち上がり、彼女をぎゅっと抱きしめた。すっぽりと隠れてしまった彼女はひっく、ひっくと鼻を鳴らし涙を流した。その度に彼女を抱きしめている俺の腕に力が入った。

「……梶山君を好きになったこと、嫌になって後悔したことがあるんです。出会わなければよかったって。でもそんなこと思ってちゃ駄目なんですよね。あのときの私は、恋してることで生きてるって感じてたんですから」

なんて。

なんて愛おしいんだろう。

俺は……俺は……。

「伊東……俺は何をしたらいい？何をあげたらいい？」

彼女はくすっと笑い、涙を拭いてこう言った。

「梶山君は何もしなくていいんですよ。だって、いろんなものを貰いましたから」

しばらくして、ピリリッと聞いたことがある音が鳴った。

彼女の薬の時間だ。

第6話：3日目（3）

「薬飲まなきゃ」
彼女が俺の腕をはずして、カバンを置いている場所へ歩いた。俺もその場所へ足を向かわせた。
「あっ！」
前を歩いていた彼女は、足を砂浜に取られ体のバランスを崩し後ろ向きにひっくり返った。俺は彼女を支えようと駆け寄ったが、俺の足も砂浜に取られ、顔面から砂浜に突っ込んだ。そんな俺の上に彼女が倒れ込み、結果的には助けることができた。
「ご、ごめん」
「……いや、大丈夫？」
彼女はさっと起き上がり、俺に手を差し伸べた。
「梶山君は？　大丈夫？」
俺は彼女の手を取り立ち上がった。
「ドジっ子だな」
「ド、ドジっ子？」
「ほら、俺と教室で会ったとき、ドアにぶつかってたし、ラブレター間違えてるし」
「間違えたのは、頭がパニックになってて……」
「ぷっ。普通テストと手紙間違えるかよ」
俺はわしゃわしゃと彼女の頭を撫でた。みるみるうちに真っ赤になる彼女が可愛かった。
「く、薬飲まないと……」
彼女は慌ててカバンの中に手を突っ込んだ。あの巾着袋から数種類の薬を取り出した。
「ほら」
俺は自動販売機で買ってきたミネラルウォーターを手渡した。ありがと、と彼女は薬を飲んだ。

「はぁー」
「大丈夫か？」
「はい。ありがとうございます」
彼女はいつもの笑顔を俺に見せた。
「……そろそろ帰ろうか」
「はい」
彼女は小さく頷いた。

俺たち、これからどうなるんだろう。
駅までの道を歩きながら考えていた。
俺はどうしたらいいんだろう。このまま何もしないで、彼女の病気が悪化していくのを、ただ見ていることしかできないのか？

「ごめんなさい」
「え？」
彼女が突然謝った。
「私があんなこと言って、梶山君に迷惑をかけてしまいました」
「迷惑だなんて、俺」
「よく考えてみれば、私たち恋人同士でもないんですよ？　おかしいですよね、こんなこと」
彼女は俯いたまま立っている。海からの風が彼女の髪を乱した。
「梶山君、難しく考えないでください。私が勝手に言っただけなんですから」
「！」
彼女の言葉を聞いて俺の心がざわついた。何だ？　イライラする。
「あのさっ！　俺の話聞いてくれる？」
俺の張った声に驚いた彼女。目が点になっている。
「俺ね、迷惑だって思ってないんだよね。それに、難しく考えてるのは、伊東のことを簡単に受け止めてるわけじゃなくて……」
「……」

あ、あれ？　俺何言ってんだよ。
「だ、だから、俺は」
あーっっ！　分からなくなってきた！
……それにしても、静かだな？
「おい？」
そう呼びかけると、ドサッと何かが落ちた音がした。
「！　伊東！」
彼女は前に倒れ込んでいたのだ。彼女を仰向けにすると、はぁはぁと、とても息苦しそうな声が聞こえた。
「大丈夫かよっ！　きゅ、救急車！」
俺は慌てて携帯電話を掴んだ。
「わ、私……ごほっ、ケー、ケータイ」
彼女が手にしたケータイを受け取り、アドレス帳を開いた。そこには行きつけの病院の名前があった。

すーすー……。
殺風景な病院の個室に、彼女の寝息だけが聞こえてきた。静かに眠っている。
「はぁ……」
深い溜息が漏れた。やっぱり連れ出すんじゃなかったな……そんな後悔が俺を襲った。
俺が連れ出したからあんなことになって倒れてしまった。俺って本当にバカだ……。何の理由もなく彼女を連れ出してしまった。
「……何の理由もなく？」
本当にそうなのか？　何の理由もないのに、こんなことするのか？
突然、ドアが開く音がしたので椅子から立ち上がった。入ってきたのは４０代後半の女性だった。
「小春……っ」

そう呼んだ女性は、彼女のベッドへと駆け寄った。
この人、母親だ！
「あぁ、だから言ったのに…」
伊東のおばさんはそっと彼女の頬を撫で、椅子に腰を下ろした。そしてちらっと俺の方を見た。
「……あなたが梶山君ね？」
「あ、はい！あの、す、すみません！　俺のせいで伊東……伊東さんが」
かたかたと俺の声が震えた。おばさんはふっと笑った。
「いいのよ、怒ってなんかいないから。さ、座って」
おばさんは、ベッドの下にしまっていた椅子を俺に渡した。
「……怒ってないんですか？」
「えぇ。小春が望んでいたのなら。本人もこうなることは分かっていたでしょう」
でもバカな子ね、とおばさんは苦笑いをした。
「……今日は海に行ったの？」
「え？」
「潮の香りがしたから」
「あ、はい。水族館に……」
「そう、水族館に」
おばさんはにこっと笑った。
「小春、驚いたでしょうね。大きな水槽を見て。水族館なんて行ったことなかったから」
すーすーと眠る彼女を、おばさんはとても暖かい目で見つめていた。
「小春ね、動物園にも行ったことがないのよ。……可哀相よね」
暖かい目だったおばさんが、だんだんと暗い顔に変わり、目には涙が光っていた。
「……」
「あぁ、ごめんなさい」
おばさんはそっと涙を拭いた。

「あなたに会うまでこの子は……何て言ったらいいのかしら。自分の運命を受け入れていたの。命が短いことを知っていたの」
「……っ」
俺はズキンッと心が痛んだ。
「私たちは諦めないでって言い続けてたんだけど、小春には届かなかった。でもね、あなたに会ってから変わったのよ」
おばさんは、ぱあっと表情が明るくなった。
「生まれ変わったように見違えたの。あんまり笑わなくなった子が、昔みたいに笑うようになって……。あなたのおかげよ」
「い、いや、俺は何もしてませんから」
「いいえ、あなたのおかげで小春は今まで生きてこられたのよ。だからお礼言わせて？ありがとう」
「礼なんて……だって俺、本当に何にもしてないし」
俯いて話す俺は、泣きたいのを我慢して話した。俺が泣くより、おばさんのほうがいっぱい泣きたいはずなんだ。俺がおばさんの前では泣いては駄目だ。
「俺、バ、バカだから。今日だって無理やり外に連れ出したし」
もうこれ以上話したくない。話せば話すほど、彼女の顔が頭に浮かび、泣きたい気持ちが強くなる。……泣きたい？どうして俺はこんなにも泣きたいんだ？
「そんなことしても、伊東の病気は治らないって本当は分かってたんだ。でも連れ出した」
「どうして？」
「こ、このままじゃ駄目だって思ったんだ。何か探さないと、探さないと伊東は……」
「あなた、小春のことが好きなのね」
おばさんの言葉が、すっと俺の体の中に溶け込んだ。
「俺……」
自分の気持ちに気づいた瞬間、俺の目からたくさんの涙がこぼれ落ちた。

そうか、そうなのか。何かしてあげたい気持ち。愛おしく思う気持ち。何も出来ない自分が歯がゆい気持ち。泣きたい気持ち……。これは彼女が好きだから思う気持ちなんだ。

「小春が目を覚ましたら伝えてあげて。きっと喜ぶから」
おばさんはすっと立ち上がった。
「さてと、しばらく入院することになったから、その準備してくるわ。梶山君、小春のそばにいてあげてね」
俺はこくんと頷いた。おばさんは彼女に似た笑顔を見せて病室を後にした。俺は目線を彼女に移した。彼女は何も知らない顔でスヤスヤと眠っている。
「何ぐっすり寝てんだよ。はやく起きろよ、ドジっ子」
俺はぐすっと鳴る鼻で呟いた。

第7話：不安

彼女が入院することになって、俺は毎日彼女の元へ通うようになった。
「そう言えば、学校……」
見舞いに来て４日目。彼女が思い出したように呟いた。
「梶山君、学校ですよ！　補習が……」
「あ、大丈夫。ヤマ先生に了解取ってあるから」
俺はシャクシャクと自分で切った林檎を口に運んだ。彼女は心配そうな顔をしている。
「本当だよ。ヤマ先生から見舞いに行ってやってくれって、頼まれたぐらいだから」
まぁ、頼まれなくても勉強サボって行くけどね。
この間、自分の気持ちが分かって以来、何だか体が軽い。ふわふわと常に宙に浮いている感じだ。いつもと変わらない毎日のはずなのに、キラキラと輝いて見える。恋って素晴らしい……！
「でも勉強しないと……あ、いい考えがあります」
彼女はぽんっと両手を叩いた。そして、ベッドの隣に備え付けられている、棚の引き出しから教科書を引っ張り出した。
「ちょ、ちょっと」
「私がここで勉強をみます。これなら大丈夫ですよ」
彼女はにっこりと微笑んだ。しかし今の俺の顔を見て、だんだんと眉が下がり、目が垂れ目になっていった。
「……駄目ですか？」
「えっ、あ、駄目なわけじゃないけどさ」
俺は慌てて考えた。ここまで来て勉強だなんて冗談じゃない。こっちはやっと自分の気持ちに気が付いたんだ。しばらくはこの気持ちに酔っていたい！
「あ、伊東はまだ本調子じゃないだろ？　俺のことは心配しなくて

いいんだ。今は自分のことを考えてくれよ」
「それが、病院の先生にも伝えてるんですけど、私、本当に大丈夫なんです。入院なんて、こんな大袈裟な……」
「大袈裟なことじゃないよ。また何かあったら大変だろ」
俺は切った林檎を食べた。彼女は何か言いかけて、でも結局何も言わなかった。
「なに？」
「いえ、何でもないです」
彼女は布団を頭まですっぽり被せた。その口調、仕草から、俺に対して怒っているような感じがした。
「どうしたの？」
聞いてみても、彼女は深海の貝のように口を開かない。俺は、また海のときのように興奮させてはいけないと思い、それ以上は聞かなかった。
それからというもの、見舞いに行っても彼女の態度からは、俺に対して何かしらの怒りを感じるようになった。当然気になって仕方がなかったが、前のことが俺にとってとても深くのしかかり、踏み込んで聞くことが出来なかった。そんなある日、俺にとって嬉しいニュースが飛び込んできた。

「手術ですか？」
彼女のお母さんが嬉しそうに笑いながら教えてくれた。ちょうど、病院の自動販売機でコーヒーを買ったばかりだったので、その話を聞いたときは、コーヒーが手からひっくり返りそうになった。
「いつするんですか？」
俺とおばさんは病院の談話コーナーに移動した。ここは畳が敷かれていて、とても和めるスペースになっていた。
「実はね、日本で受けるんじゃなくて、アメリカ受けるのよ」

「ア、アメリカ！？」
海外遠征みたいなものか。……いや、ちょっと違うな。
「凄いですね。その手術を受けたら、病気は治るんですよね」
俺ははやる気持ちを抑えて聞いた。しかしおばさんからは、歯切れの悪い返事が返ってきた。
「えぇ、でもね……」
「どうしたんですか？」
「その手術の成功率が、３０パーセントもないの」
３０パーセントもない？　それってつまり……。
「成功しない確率が高いってこと……」
おばさんは静かに頷いた。いつの間にか談話コーナーには、俺とおばさんだけになっていた。窓の外から蝉の鳴き声が聞こえた。
「そのことは本人には？」
「昨日伝えたの。そしたら小春、手術は受けないって」
「ど、どうして？」
俺の心臓は口から飛び出るくらい、大きな脈を打った。じわりと汗がにじみ出た。
「私にも分からないの。何度聞いても教えてくれない。私と主人は、例え成功率が低くても、治る可能性があるならって考えてるんだけど」
おばさんは、ふぅっと息を吐き、よいしょっと立ち上がった。
「もしかしたら、梶山君にだったら、理由を話してくれるんじゃないかなって思ったの」
「そうですか……。俺、その理由聞いてみます」
「ありがとう。私もね、頑張って説得するつもりよ。あの子にはまだまだ、知らないことがたくさんあるから。こんなところで躓いてほしくないからね」
私は今日は家に帰るから、梶山君はゆっくりしていってね、とおばさんは俺に会釈をしてその場を後にした。俺は持っていたコーヒーをぐいっと飲み干した。

「伊東？」
俺は静かに病室のドアを開けた。返事はなかった。彼女は上半身を起こし、窓の外を見ていた。
「起きてたなら返事しろよ」
「……ごめんなさい」
俺はベッドの隣に置いてあった椅子に座った。ふわっと窓のカーテンが風のせいで揺れた。涼しい風だった。
「もう夏も終わりですね」
彼女がじっと外を見ながら言った。日はもう傾いていて、赤とんぼが、あちらこちらに飛んでいた。俺は久しぶりに、彼女から話しかけてくれたので嬉しくなった。
「そうか？　まだ暑くて嫌になるけどな」
「夜はもう涼しいですよ」
俺は壁に貼り付けてあるカレンダーを見た。今日は８月２０日なので、夏休みはあと１１日しかない。もうすぐ９月、新学期が始まる。
「夏休みが終わるな」
今年の夏を思い返してみた。全教科赤点を取ったせいで、夏休み中に学校で勉強をするハメに。嫌々行った学校で彼女に会い、俺は彼女に恋をした……。まさか自分がこうなるとは予想もつかなかったな。
「あ、そうだ」
俺はおばさんの手術の話を思い出した。
「手術……受けるだろ？」
ぴくっと彼女の手が反応した。そして顔を俺に向けた。どうして俺が、手術のことを知っているのか分からないみたいだ。
「おばさんに聞いたんだよ。伊東がアメリカで手術を受けることが出来るって」

「そうなんだ」
彼女の顔は、手術が受けられて嬉しい……というより、考えたくないことを、目の前に叩きつけられてしまったような、バツの悪い顔だった。
「何で受けないって言ったんだよ」
「何でって……当たり前です」
「当たり前？」
俺は少し声を強めて聞いた。
「その手術の成功率、聞きましたよね？　半分も無いじゃないですか。そんな不安な手術、簡単に受けたいなんて考えられません」
「……そりゃそうだけど」
成功率３０パーセント未満。とても可能性が低い数字だ。でも俺は彼女を死なせたくない。このまま彼女を、病気との一生で終わらせたくない。
「数字は低いけどさ、今しかないんだぜ？　治る可能性がないわけじゃないだろ」
「……私の何が分かるんですか？」
今まで聞いたことがないような、彼女の冷たい声が俺の体を刺した。
「私の気持ちが分からないくせに、簡単にそんなこと言わないでください」
「い、伊東？」
予想外の彼女の反応に、俺は何を言ったらいいのか分からなくなった。ただただ、彼女を落ち着かせることだけを考えていた。
「興奮しちゃだめだよ。ほら……」
彼女をなだめようとしても、彼女が俺を受け入れなかった。
「触らないでっ！」
彼女はドンッと俺の体を押し返した。体全体で俺を拒絶していた。
……それがスイッチとなってしまった。今まで積もりに積もった、彼女から感じていた、理由の分からない怒りを、俺はとうとう爆発させてしまった。

「何だよ」
俺の低い声に、彼女は我に返ったようだ。ご、ごめんなさいっ、と俺を押していた手を引っ込めた。けれどもう遅かった。俺の心の言葉は、とめどなくあふれ流れた。
「分かるわけねぇだろ！」
かっとなった俺は、彼女を見下ろす形になった。彼女は震える瞳で俺を見上げていた。
「ご、ごめ」
「お前が言わなきゃ何も分からないんだよ！　前に言ったよな、俺と一緒にいたい、生きていたいって！　あれは嘘だったのかよ！？」
はぁはぁと、俺は肩で息をしていた。
「嘘なんかじゃないです。あれは本当に……」
一呼吸置いて、彼女は震える声で答えた。俺は収まらない熱にまかせた。
「だったら何で！」
「生きたい……生きたいけど、そんな可能性の低い手術に望みなんて持てない」
彼女は瞬きもせずに続けた。大粒の涙が布団のシーツに落ちて染みになった。
「もし手術に失敗してすぐ死んでしまうより、今生きてる、この瞬間を生きていたい。今を生きたいの」
「そんなの……」
俺は彼女の思いを聞き、あんなに熱かった心がだんだんと温度を下げていった。じわじわと涙がこみ上げてきた。
「そんなの寂しいじゃないか」
俺の言葉に、一瞬彼女の涙が流れるのが止まった。
「今を生きたいって、今を生きたって伊東の明日には繋がらないんだぜ？」

だってそうだろ？

お前は病気なんだ。いつ発作が起こるか分からない。もしかしたら、来年は死んでしまっているかもしれない。来月には、来週には、明日には……。毎日が病気と一緒なんだ。病気に怯えて生きていくんだ。そんな毎日、生きてるって言えないだろ？

そうじゃないだろ？

俺たちは、ただ今を生きてるんじゃない。

明日に繋がる今を生きてるんだろ？

「……俺、お前のことが好きなんだ」

鼻をずずっと鳴らして言った俺の告白に彼女は瞬きをした。

「だからお前には生きてほしいんだ。今だけじゃなくて、明日も来年も」

「梶山君……」

彼女の呟いた言葉に、無我夢中だった俺は我に返った。どうやらスイッチが切れたみたいだ。

「あっ、だ、だからさ」

俺は急に恥ずかしくなった。ここから逃げ出したくなった。

「とにかく、手術を受けろってこと！　可能性がなんだ、数字なんかに惑わされるな！　あと、おばさんが心配してたからなっ」

早く去りたい気持ちが強くなり、そうだ、今日は用事があったんだ！　と、大きな独り言を口にした。

「じゃ、じゃあまたな」

「はい、また」

いつの間にか、彼女はいつもの笑顔を見せていた。俺は手を振り、彼女の病室を後にした。

あぁ、なんて恥ずかしい台詞を言っちゃったんだろ。しかも告白しちゃったし。帰りの電車の中。俺は電車のドアに体を預けていた。ガタン、ゴトンとリズムのいい電車の振動が俺の体に伝わった。恥ずかしい台詞だけど、本当にそう思ったんだ。俺は彼女と一緒にいたい、生きていたいんだ。

「手術、受けてくれるかな……」

俺が人生初めて告白をした日から翌日。俺は、恥ずかしくて顔を合わせたくない気持ちと、手術のことが気になる気持ちがごちゃ混ぜになっていた。しかし、ふんっと自分に気合いを入れて、病室のドアを開けた。そこには元気な様子の彼女がいた。笑顔で出迎えてくれた彼女は開口一番、こう言った。

「私、手術を受けることにしたんです。また梶山君に、いろんなものをもらっちゃいましたね」

第8話：出発前夜

彼女の『手術を受けます』宣言から1週間が経った。
季節は夏から秋へと、8月から9月へと変わっていた。夏休みは終わり、学校が始まったのだ。
「雪人、小春ちゃんとはどうなった？」
今日は始業式だ。久しぶりに見るクラスメイトたちは、それぞれの夏の出来事を報告しあっていた。ユウジが少し遠慮がちに聞いてきた。
「あぁ、手術を受けることになったんだ」
「え！　やったじゃん」
ユウジは自分のことのように喜んだ。
「良かったな。これで安心だな」
「……それが、そうでもないんだな」
俺の情けない声に、ユウジはさっきまでの笑顔から、きょとんとした表情に変わった。俺は彼女の手術について話した。
「３０パーセント未満……それは難しいな」
「だろ？　でも、受けるって言ってくれただけで嬉しいんだ。後は応援するだけ」
「雪人……お前、何だか変わったな。カッコいいよ」
「サンキュ」
俺はふっと空を見上げた。この空を彼女も見ているだろうか。病気が治ったら、いろんな場所へ彼女を連れて行こう。そして、彼女と一緒に生きていくんだ。

「何だって？」
俺の頭のてっぺんから、足のつま先まで衝撃が走った。今聞いた言

葉が信じられない。目からキラキラ星が飛び出た。
ここは彼女の病室。学校が始まり、2、3日が経った今日、俺は学校の帰りにお菓子を買い込んで見舞いに来ていた。
「ごめん、もう一度いいかな？」
「ですから、明日アメリカに行くんです」
彼女はクスクス笑って、さっき聞いた言葉と同じ言葉を口にした。
「明日行って、しばらくしてから手術するんです」
明日……。突然の話に俺は目の前が真っ暗になった。行くのは良いことなのだが、いざこういう場面に遭遇すると堪えてしまう。
「あれ？　行くの反対ですか？」
彼女がイタズラに笑い、俺の顔をのぞき込んだ。俺は慌てて平静を取り戻した。
「バ、バカ。そんなわけないだろ」
そう言って、ガサッと買い込んだお菓子を広げた。彼女が、わぁっと声を上げた。
「どれでも食べろよ」
「いいんですか？　この板チョコ、好きなんです」
彼女は嬉しそうに板チョコを手にした。そして、ピリリッと包み紙を破った。俺も、自分の好物のお菓子袋を開けて食べた。

時間が経つのは早い。もう外が夜になろうとしていた。空には1番星が顔を出していた。
「……そろそろ帰るよ」
俺は広げたお菓子を片付けた。彼女が寂しそうな顔で俺を見た。
そ、そんな顔で見るんじゃねぇよ。俺だって、もう少し側にいたい。しばらくは会えないんだから。……でも駄目だ。明日は彼女の大切な日。今日は早く寝て、明日に備えてもらうんだ。
「梶山君」
彼女が可愛い声で呼んだ。びくっと俺の体が反応した。
「梶山君、お願いがあるんです」

「お願い……？」

「なぁ、ヤバイって」
「何言ってるんですか、ここまで来て。私はこの日のために、いい子で通したんですよ」
彼女は久しぶりの制服に身を包んでいた。
ところで今俺たちは、薄暗い病院の中をさまよっている。
彼女のお願い、それは……学校に連れて行ってくれ、ということだった。彼女の熱意に押され、また自分の一緒にいたい願望が手伝って、彼女の願いを叶えてあげることにしたのだ。
「しっかし、夜の病院はマジで怖いな」
俺は彼女を後ろに従えて、あたりを見渡していた。
「梶山君、ユーレイとか苦手なんですか？」
彼女は俺の後ろで、次にどこへ行けばいいのか、指示をしていた。
彼女が言うには、病院の地図はすべて頭に入っている、ということだ。
「バ、バカ！　そ、そんなことないしっ」
図星だ。俺はこういう場所、そういう類の話は、大の苦手なのだ。
一方、彼女は平気そうだ。怖がるというより、むしろ、この状況を楽しんでいるみたいだ。
「ここを抜ければ外に出られます」
「よ、よしっ」
俺はぐっと手に力を入れ、彼女の手を引いて走った。

「あー、久しぶりの学校です！」
無事、誰にも見つからずに病院を抜け出し、学校に着いた。
あれ？　ひょっとして俺、またイケナイことしてないか？

学校に着いて後悔する、俺。
「ユウジ、ごめんよ。俺やっぱり何も変わってないみたいだわ」
「何言ってるんですか。さ、中に入りましょ」
「あぁ。……って、中だって！？」
俺は度肝を抜かれた。中に入るなんて、それはさすがにヤバイだろ。こいつ、さらっと言いやがって。
「ここまでだ。だいたい中に入る方法はないんだぜ？　正門も裏門も閉じてるし……」
「早く入ってきてくださーい！」
「……え？」
俺はきょろきょろと彼女を探した。さっきまで、俺の目の前にいたのに、姿がない。ぐるっと視界を1周してみると、なんと学校の敷地内に彼女が立っていた。
「どこから侵入したんだよ」
「あそこのフェンスに、大きな穴が開いてるんです」
管理、甘っ。フェンスの意味ナシ。大丈夫かよ、この学校。
「先に行ってますね～」
「あ、おい、ちょっと」
彼女はぶんぶんと手を振り、校舎の中へ入っていった。

「梶山君、こっちですよ」
彼女はわくわくしながら、俺たちの教室に入った。俺もその後に続いた。彼女は俺の席に座った。
「あ、そう言えば、初めて伊東と話したときも、ここに座ってたよな？」
俺は自分の席の隣の椅子に座った。
「それは、前はここが私の席だったんです。私が入院して、席替えをしちゃったみたいですね」

俺は、そうだったんだと、彼女と話をしたときを思い出した。今思い出しても、あの見事なドアの直撃は笑ってしまう。
「な、何笑ってるんですか！」
「いや、別に……おっかし」
「や、やっぱり笑ってるじゃないですか！」
彼女は顔を赤くし、口をへの字に曲げた。
「だってさ、ラブレターとテスト用紙を間違えてんだぜ？　そして見事なぶつかり」
「だから、それはっ」
彼女はふんっとへそを曲げてしまった。ごめんごめん、イジメすぎたな、と俺は笑いながら謝った。
「そうだ、アメリカに行っちゃう前に、聞きたかったことがあるんだ」
すっかり夜の教室に慣れた俺は伸び伸びとしていた。
「手術受けることにした理由って、聞いてもいい？」
彼女は少し、はにかみ頷いた。
「梶山君の言葉を聞いて、もう一度考えてみたんです」
彼女は遠い目をして話し始めた。
「私の生きたい『今』は、どんな『今』なんだろうって。そして想像したんです、私の未来を」
彼女は静かに目を閉じた。月の光が窓から差し込み、彼女の横顔がきらきら光って見えた。
「手術を受けない『今』を生きた私は、いろんな楽しいことを想像しても、やっぱり最後は、梶山君と離れてしまうんです。次は、梶山君の言う『明日に繋がる今』を想像したんです」
目を閉じていた彼女は、静かに目を開けた。そして俺に向かって、とびっきりの笑顔をくれたのだ。
「明日に繋げるために手術した私は、見事に成功して梶山君と歩いてるんです。いろんな場所……私がまだ行ったことのない場所を。すごく楽しくて、すごく幸せだった……」

見事に成功って、確証もないんですけどね、と彼女は舌を出して笑った。
「明日に繋がるって考えれば、手術は絶対成功するよ」
俺は少し鼻声になって答えた。彼女がびっくりした顔で、
「だ、大丈夫ですか？」
と、俺を心配してくれた。俺は大丈夫だから、と彼女を安心させた。
「それに生きて、もっと梶山君の言葉を聞いてみたいなって思いました。梶山君の素敵な言葉……」
「す、素敵って、お前よく恥ずかしい言葉を……」
俺はドキドキドキ……と、いつもより早めの脈を打つ心臓を抑えた。
彼女はニヤッと笑い、
「あら？　恥ずかしい言葉なら、梶山君のほうが言ってる気がしますけど？」
と、挑戦的な態度に出た。
「あ、お前、まさかっ」
はっと気が付いた俺は、みるみるうちに全身が茹で蛸のように真っ赤になった。彼女が言おうとしていること。恐らくそれは……。
「『俺はお前が好きなんだ』……でしたっけ？」
カーッと、俺の全身の毛穴から湯気が噴き出した。沸騰したやかんの蓋のように、心臓が蒸気によってカタカタと上下に揺れた。有り得ない心臓の動きだ。もしかしたら、俺もアメリカで手術を受けたほうがいいかもしれない。
「人をからかうなよっ」
「あはは、ごめんなさい……ごめん、なさい」
急に彼女の声が静かになった。俺は彼女の変化に気が付いた。泣いていたのだ。
「どうした？」
俺は優しく聞いた。彼女はポロポロと涙を流した。
「あの時は、ごめんなさい。毎日、お見舞いに来てくれたのに、私冷たい態度で……」

「もう大丈夫だよ。何か理由があったんだろ？」
彼女は小さな子供のように肩を震わせていた。俺はそっと肩を自分のほうへ引き寄せた。彼女の柔らかな髪が、俺の頬をかすめた。
「あの時……梶山君が、病院で勉強をすることを断ったとき。私は勝手に、梶山君ならこんな狭い病室から、私を助けてくれる、水族館のときみたいに、私を連れ出してくれるって思ってたんです」
彼女はゆっくり、ゆっくりと話してくれた。
「でもそうじゃなかった。裏切られたような気がして、勝手に怒ってたんです。だから……ごめんなさい」
「いいんだよ。実はさ俺、その時自分のことばかり考えてた。伊東が好きだって気付いて、この初めての気持ちに酔ってたんだ。だから俺もごめん」
俺は彼女の頭を、ぽんって叩いた。静かに泣いていた彼女は、今度は鼻を鳴らして泣き出した。
「うわ、ごめんって。悪かったよ」
俺は焦って彼女から手を離した。彼女は違うんです、と首を横に振った。
「怖いんです」
「怖い？」
「手術……」
俺は少し彼女を見つめ、また彼女を自分のほうへ引き寄せた。
「本当は怖いんです。生きたいってどんなに願っても、もし失敗したら？　失敗したら今日が、本当の最後になってしまう」
彼女の悲痛な心の叫びだった。
手術をすると口にした、彼女の心の奥深くでは、こんな叫び声をあげていたんだろう。俺は全く気が付かずにいた。
「大丈夫、大丈夫だ。伊東は失敗なんかしない。俺がついてるから」
ぎゅっと彼女の手を握った。すると彼女のほうからも、ぎゅっと握り返された。
「大丈夫、大丈夫……」

子供を寝かしつけるように優しく語りかけた。俺は彼女の髪に軽く口づけをした。それに気付いたのか、彼女はそっと顔を上げ、今度は彼女の唇にキスをした。

「大丈夫、大丈夫……」

子守歌のように囁いた。いつの間にか、俺の目にも涙が溢れていた。

大丈夫、大丈夫……。

そしてとうとう翌日。彼女は元気良く日本を出発した。

最終話：ラブレター

2年間という期間が、こんなに長いものだなんて初めて知った。2年間より長い、高校3年間なんて、あっという間に過ぎていったのに。

そう。あれから2年が経ち、彼女が日本を旅立って2回目の夏。俺は大学生になり、ユウジと一緒に隣町の大学へ通っている。彼女が日本を旅立って、俺は猛勉強をした。猛勉強なんて高校受験以来だった。ヤマ先生はいつも、

「お前、悩みでもあるのか？」

と何度も、職員室に呼びつけた。

「だーかーらぁ、大学に行きたいから勉強してるだけっす。悩みなんて……あるとすれば、この問題を教えてほしいんですけど」

ヤマ先生は口をポカンと開けて、あぁ……と返事をした。猛勉強のかいあって、見事大学に合格。ユウジとキャンパスライフを楽しんでいる。

「雪人、次は臨時休講だってよ。もう昼から授業ないよな？　久々に遊びに行こーぜ！」

バイク置き場へと歩いていた俺を、ユウジが後ろから呼び止めた。

「あー、ごめん。今日バイトなんだよ」

俺はちらっと携帯電話の画面を見た。

「えー、マジかよぉ。この間もそうだったじゃん」

「うーん、金稼がないとさ」

悪いな、とユウジに向かって両手を合わせて謝った。そしてヘルメットを被り原付バイクにまたがった。

「そんなに金に困ってたっけ？」

「貯金してるんだよ」

ヘルメットの紐を顎にかけ、バイクのキーを回した。ブルルンッと

バイクが鳴いた。
「貯金って、もしかしてアメリカに行く？」
「……まあな。大学受験でバイトすることが出来なかったし、大学1年は免許取ったりで忙しかったからな。今しかないんだ」
「そっか。小春ちゃんの手術はどうなった？」
ユウジの言葉が、俺を後ろから突き刺した。
「え、もしかして……」
「いや、それが連絡先を聞くのを忘れてて、成功したのか分からないんだ」
ユウジはあんぐりと口を開けた。俺だってビックリした。勉強しか頭になくて、肝心な連絡先を聞いてなかったのだ。
「ヤバイ、時間だわ。じゃあな」
「おー、頑張れよ」
俺はユウジに軽く手を振って別れた。

「だるぅー……」
バイクに乗りながら呟いた。今は夜の8時。昼過ぎからさっきまで、コンビニでバイトをしていた。昼からはあまり客もなく楽チンだったのに、夕方にかかるとどっと人が多くなった。たまにこういう日もあるのだ。
ドルンッとバイクを家の車庫に止めた。キーを抜き、ヘルメットを小脇に抱えてバイクから降りた。
「ただいまぁー」
「お帰りぃ」
母親の声が出迎えてくれた。
「あ、ちょっと待って。郵便見てくれない？」
「はぁ？」
靴を脱ごうとした手を止めた。母親は声だけで俺の相手をしている。

「母さん宛てに手紙来てない？」
自分で見ろってーの。腹が立ちながらも郵便受けを見た。母親宛てかは分からないが、何通か手紙がきていた。
「来てたよ、ほら」
母親にＡ４の大きさの封筒を渡した。
「ありがと」
「ん。……あれ」
俺宛てに来てる。
それは、切手を貼っていないし、俺の住所も書かれていなかった。ただ名前だけが俺の名前になっている。差出人の名前も書かれていない。
「イタズラ……か」
俺はその手紙をゴミ箱に捨てた。しかし何だかそわそわする。何かを見落としているような気がするのだ。ヘルメットを玄関に置き、今捨てた手紙を拾い、自分の部屋に入った。

「見た目は普通、だな」
俺は少しドキドキしながら封を開けた。宝物の箱を開けたような緊張感があった。
「梶山　雪人様。お話したいことがありますので、あの教室で待っています。……なんだ、これ」
見た目、字からして女の子の字のようだ。
「まてよ……」
この字、前に見たことがあるような……。
「あっ」
俺はぴんっと一瞬にして答えを導いた。そして風のようにすばやく階段を降りた。
「出かけるの？」
母親が俺を呼び止めた。俺は生返事をして、靴を履き、再びヘルメットを手に持った。

「晩御飯、出来たのに」
「帰ってから食べるから。じゃ」
俺は言い終わらないうちに玄関を飛び出た。そして原付に飛び乗り、キーを回した。原付が、まだ走るのかよ……と迷惑そうに鳴いた。

あの丸っこい字、彼女に違いない。
バイクに乗りながら、彼女と手紙のことを考えていた。その手紙の字は、初めてもらった、テストのラブレターの封筒に書かれていた字と同じだった。つまり、彼女はアメリカから帰ってきているのだ。と、いうことは……。
「そうだよ、そういうことだよな。間違い……じゃないよな」
俺はぎゅんっとハンドルを回して先を急いだ。

2年ぶりの母校は何も変わっていなかった。眺めていると、あの頃の思い出が走馬燈のように駆け巡った。
よく3年間も通ったよな。クラスの奴らはどうしてるんだろ……。しばらく、ぼーっとして自分の目的を思い出した。ヘルメットを外し、バイクに鍵をかけた。時間は夜の8時半すぎ。学校は真っ暗だった。あるひとつの教室を除いては。
「あそこは、俺のクラス」
やっぱり彼女が帰ってきたのだ。俺は正門を押してみた。しかし当然、門は頑丈に鍵がかかっていた。
「となると……」
昔、夜に学校に忍び込んだことを思い出した。まだ穴が開いてるといいんだけど……。少し不安になりながらフェンスのほうへ走った。フェンスの前に立つと、外からの訪問者を受け入れるように大きな

穴が開いていた。
「そろそろ、ヤマ先生にでも教えといたほうがいいかもな」
俺は服がフェンスに引っかからないように、慎重に穴を通った。穴を通ったとき、気持ちがあの頃に戻ったような気がした。

長い階段を登り、とうとう明かりの点いている教室に着いた。ぜいぜいはぁはぁと、息絶え絶えな俺は心臓を落ち着かせた。もう若くないんだな、と苦笑いをし、気合いを入れて教室のドアを開けた。
ガラッ。

「……伊東？」
俺の目に、あの頃と全く変わらない後ろ姿が飛び込んできた。俺の言葉に反応して彼女は、こちらに振り返った。
「梶山君……。え、えっと、帰ってきました！」
彼女はやはり、あの頃と変わらない笑顔を俺にくれた。
「あ、あの、連絡先とか教えなくて、ごめんなさい。ばたばたと急に決まって行ったから、教えることが出来なくて」
「……本当だよ、ドジっ子」
俺はふっと笑い、ゆっくりと彼女に近づいた。彼女は嬉しいのか恥ずかしいのか、顔を林檎のように真っ赤にしていた。俺と彼女の間の距離は、手を伸ばせば彼女に届くまで近くなった。
「手紙、読んでくれたんですね」
「まあな。差出人が分からなかったけど」
彼女は眉間にしわを寄せた。そして、書き忘れていたことを思い出したようだ。
「ったく、アメリカから帰ってきたんで、少しは成長してるかと思ったら……。ドジっ子は変わらないな」
「ごめんなさい！　私……あれぇ？　で、でもここは成長しました

よっ」
彼女は慌てて自分の胸に手を当てた。
「成功、したんだな」
「……はい。私の今は、明日に繋がるんですよね。これからもずっと」
彼女が静かに目を閉じた。あの日を思い出しているようだった。俺も彼女と同じように、記憶をあの日に飛ばした。

あの日。

彼女が手術を受けないと言った、あの日。俺は本当に彼女に生きてもらいたくて、これからも彼女と一緒にいたくて、自分の正直な気持ちをぶつけた。彼女は俺を受け入れ、手術を受けることを決めた。

「梶山君、あのとき私に告白しましたよね」
「お、お前なぁ」
2年前のことなのに、昨日のことのように思い出した俺は、顔を真っ赤にした。そんな俺を見て彼女はクスクス笑った。
「私、まだ返事してないですよね？」
一瞬にして、体に緊張が走った。返事って今更の話だろ？　今更……もしかして、俺フラレるのか？
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　心の準備が」
緊張のせいで、腹がキリキリと痛み出した。ちくしょー、俺ってばカッコ悪い。彼女はまたクスクスと笑っている。
「だったら待ちます。その間、私の話を聞いてください」
「お、おぅ」
彼女は深呼吸をして、すっと俺の目を見た。
「私、入学したときから梶山君のことが好きなんです」
彼女の真剣な瞳は、がっちりと俺を捕まえて離さなかった。俺は腹の痛みを忘れて彼女に見入っていた。

「良かったら私と……付き合ってください」
彼女のすっと俺を見つめる瞳。
ドジっ子だと思っていたのに、彼女はしっかりと立っている。
俺はそっと手を伸ばし、彼女を自分の胸の中に隠した。
「俺も」
彼女の存在を確かめるように、ぎゅっと抱きしめる。柔らかい彼女の髪が、俺の頬に当たる。
「俺も好きだ。2年間、お前を待ってたんだ」
彼女の手が俺の後ろに回り、ぎゅっと抱きしめた。
「嬉しいです。私も梶山君に逢いたかった……」
彼女が、俺の胸に押しつけていた顔を離し、俺の顔を見た。涙が瞳を濡らしていた。キラキラと光ってとても綺麗だった。俺はゆっくりと顔を近づけ、軽く彼女の片目にキスを落とした。ポトリ、と涙が滴になって頬を流れた。
「好き……もう離さないからな」
「……はい！」

end.

最終話：ラブレター（後書き）

最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございます。途中、評価や感想をいただき、頑張って書き上げました。

さて、雪人と小春のその後ですが、小春はもう一度、高校生活3年間をやり直し、無事卒業。
雪人は大学を卒業し、中小企業に就職。小春が高校を卒業してすぐに結婚しました。
結婚しても、小春の発作はたまにありましたが、大事に至らず。けれど小春の敬語と、ちょっとドジなところは、変わらないみたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8428a/

夏休みの教室

2010年10月11日08時14分発行